
『残命』

ふる・たいプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『残命』

【コード】

N8850D

【作者名】

ふる・たいプ

【あらすじ】

生きていることが嫌になった男が知る意外な事実とは！？

(前書き)

あくまでもブラックユーモアのつもりで思いつきで書いたものです。深く考えないで下さると幸いです。

年齢的な順番からすれば親のほうが先に死んで当然だが、そんな
るとも限らない。

病気、事故、

そして自殺……。自殺が唯一の”救い”だと気がつくと思いに理
由なんてどうでもよくなる。

いまの問題はどうやって死ぬかだ。

「ひとりぼっちで死にたい……」

それが自分に課した条件だった。

検討をした結果『富士の青木ヶ原樹海』を選んだ、

……。はずだったのに……。

「こ、この事実を、か、かならず伝えてくれ……。た、頼むっ」
大迷惑という言葉が浮かぶ。

目の前の中年男は歩けないように両足や腹を何箇所も刺されてこ
こに捨てられたようだ。

自殺ではないことは理解できた。殺人でも親よりも先に死ぬなど
思い出す。

「じゃあ。いまの話電話なりFAXで伝えればいいんですね？」

よせばいいのに引き受けた。

「……そういえば一度入ったら出られないんだっけ」

伝言を受けてから三日経過した。と、樹海の奥のほうで何かが動
いた。

そっちへ行ってみると、いままさにロープへ首をいれている場面
に遭遇した。

「あ。すみません」

誰だか知らないがこれでやっと気がかりが消失する。誰だかわか
らない相手に有無を言わさず伝言を引き受けさせる。

そして急いで去った。

意外だったのはその二日後に樹海を抜けてしまったことだ。

戻ろうかと思っただが、向こうに公衆電話まで見える。

伝言はその後二人ばかりに伝えたので間違いないと思うのだが、皆がみな自分と違ってすぐに死んでしまったかもしれないと思うと、気がかりといえれば気がかりだ。

電話をかけると、相手はすごく驚いた様子だった。

「なんとということだ!!」

どうして誰も彼もこのことを知っているんだ!!

お前でもう二十人目だぞ!!」

伝言がネズミ講式に機能して全員が電話できたのかもしれない。

富士の樹海ではひとりぼっちで死ぬのに適さないことがわかった。

(後書き)

昔(2005/09/21)ちよろつと書いたものを、こちらへの初投稿テストに使用しました。いま読むとブラックというよりも意味不明でしたね。(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8850d/>

『残命』

2010年12月31日19時07分発行